

論文審査の結果の要旨

氏名：山方 充

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：中学校教師のパフォーマンスに関する研究－教師の自己表現を中心に

審査委員：（主査）教授 佐藤 綾子

（副査）教授 松本 洸 教授 神永 光規

当該博士論文の審査にあたっては、まず一般的に学術博士論文が認められる次の3条件に基づいて審査した。

①発見があること（オリジナリティや今までにない視点など） ②論理的批判があること（単なる思い付きや感想でなく、ほかの誰でもが追証可能な手法がとられていること） ③統合があるか（これまでの当該テーマに関する先行研究をしっかりと洗い出して、その全体像がより明らかになること）である。

このような三つの視点で本研究を審査した時に、①中学校講師の自己表現分析を主たる目的に設定した博士論文が貴重であること、②中学生対象の十分なアンケート調査により統計分析が論理的になされていること、③先行研究の主分野を占めるこれまでの佐藤綾子の大学生対象あるいは社会人対象の自己表現研究をつぶさに洗い出して統合したうえで中学生の心理的および発達のな特徴に関する先行研究を洗い出して統合したこと、の3点が注目される。

本論文は、中学校教師の自己表現を、ある一定の目的のためにある一定の効果を意図して展開されるものであるというパフォーマンス学の概念に基づく職業的演技とみなして研究を開始している。その際に、特に、昔とは大きく異なる現代の中学生の自己表現の傾向を明らかにして、その傾向も踏まえた上での「教師におけるより良い自己表現のためのトレーニングカリキュラムの構築」を目指した研究である。

近年中学校教育現場における教師と生徒との信頼関係不足による深刻な問題が増加している。このような社会問題への答えの一つとしての信頼関係づくりの第一歩として生徒が教師に好感を持つことが大切な入口となる。これについては第3章第1節で詳述されている。

内容としては、この問題意識のもとにカリキュラム選定の土台として、日常から非日常までを貫いている基礎的な概念でありアイデンティティの再構築に寄与し得る概念としてのパフォーマンスの向上という視点を見つめなおして、生徒との信頼関係構築をまず好感の獲得から開始するために、必要なカリキュラムを作成してその効果を検証したものである。

終章では、生徒に好感をもたれる自己表現力を持った中学校教師の育成を目指し、パフォーマンス学の知見を活用したトレーニングカリキュラムを教師教育に導入することが有意義であるということを実証的に示唆することができている。

本論文を構成する5章の概要および各章に呼応する評価は以下である。

第1章 パフォーマンス学とは何か

本論文第1章ではまず、パフォーマンス学の概要を、先行研究を基に整理した。パフォーマンス研究とは、Goffman (1959) による人間の演技性に対する指摘に端を発し、Schechner によってその体系が整備された、人間の演技性を探求する学問である。日本においては佐藤 (2003) によって研究と普及が進められており、「日常における個の提示“presentation of self in everyday life”」(Goffman, 1959)、「日常生活における個の善性表現」(佐藤, 2003) という視座に立てば、日常生活における我々の挙動の一切は観察、分析、強化が可能なものとなることが明らかになっている。

第2章 現代の中学生の特徴

中学校教師の理想的な自己表現を探る上で重要になる“現代の中学生像”について先行研究を基にまとめた。現代の多様化したグローバル社会においては、中学生の友人関係は多元化の様相を呈してい

る。すでに友人関係の希薄化（西垣，2009）や、キャラクターを軸とした自己表現（土井，2009）などが指摘されているが、ある特定の“キャラ”を演じることによって円滑なコミュニケーションを遂行しようとする傾向を現代の中学生における最大の特徴として明らかにした。

第3章 中学校教師の自己表現

中学校教師の理想的な自己表現に関して2種類の調査の結果を基に論じている。

調査1においては現代の中学生における理想の教師像をアンケート調査によって明らかにした。現代においては「面白い」、「優しい」、「明るい」などのポジティブな特性を持つ教師が好まれ、教師の威厳や専門性はあまり重視されない傾向にあった。回収した言葉の結びつきについては数量化Ⅲ類による散布図を作成し、「笑顔」を中心としたグループ、「接しやすさ」に関するグループ、「外見」に関するグループの三つを確認した。

調査2においては、中学校教師の非言語的パフォーマンス能力と、生徒からの教師イメージとの間に相関関係が認められるかをアンケート調査によって明らかにした。調査の結果、中学生における教師の非言語的パフォーマンス値と生徒からの好感値の関係は大学生（佐藤，2003）よりも強く、非言語的パフォーマンスの表出能力が高い教師ほど生徒からの好感度が高いという傾向を確認した。また、非言語的パフォーマンスの領域においては、「笑顔」、「アイコンタクト」、「相互作用」の3領域が、他の領域に比べて相関関係が強いことが数値で示されている。

第4章 中学校教師のためのパフォーマンストレーニングの考案

前章までに整理したパフォーマンス学の知見、現代の中学生の特徴、理想的な中学校教師の自己表現を基に、“中学校教師のためのパフォーマンストレーニングカリキュラム”を考案した。

トレーニングは1回60分の全6回と設定し、その内容は「笑顔」、「アイコンタクト」、「ヘッドムーブメント&表情」、「相互作用」に関するものとした。本トレーニングの目的は、中学校教師の非言語的パフォーマンス表出能力を向上させることによって、生徒からの好感度を上昇させるという仮説を作成してその効果を検証する5章への土台となっている。

第5章 中学校教師のためのパフォーマンストレーニングの実践

前章で考案したパフォーマンストレーニングを実践した結果を報告し、その過程とアンケート調査の結果について考察した。トレーニングの実施は、都内の公立中学校において、現役の教師2名を対象に第4章で構築したカリキュラムの内容を全て実施し、トレーニングの前後で生徒を対象に当該教師の好感度と自己表現に関するアンケート調査を実施した。その結果、1名の教師については自己評価においても生徒評価においても有意にスコアが上昇した。もう1名の教師については自己評価が大きく上昇し、また生徒からの評価においては「相互作用」に関するスコアが有意に上昇したことが報告され、仮説の検証に成功している。

結論として、山方充君は「今回の実践においても如実に表れたように、生徒とのコミュニケーション力を向上させるトレーニングにおいては、多忙な教師を一度に集めることは困難である。そこで、『時間的に余裕がある』、『トレーニングという形でコミュニケーションを学ぶことに抵抗がない』という二つの条件をクリアする条件を考えれば、『教職課程における大学生』が本トレーニングの対象として最もふさわしいのではないか」という提案をして本論文を締めくくっている。

実際に、教職課程にある大学生においては将来教師として社会に出る可能性が大いにあり、大学生であるが故に時間的余裕があることは間違いなく、また大学の授業として本トレーニングに取り組む場合においては抵抗なく訓練を受け入れることが可能だと考えられる。

本論文が示唆したように、将来中学校教師になる可能性が高い大学生段階において本研究の訓練プログラムを実行しておくことができれば、本研究の成果が最も効果的に活かされることも事実であろう。

執筆者がまだ大学生であり、中学校教師の体験がないことは当然である。しかし、ここ数年間にわたって同君は塾講師として中学生の指導をし、中学生の不満や問題意識の声も聴いてきた体験がある。その中で、義務教育の最後であり、思春期の難しい時期にある中学生教育の充実化の必要性に気づき、それをアカデミックな手法により研究し、検証したことは、長年にわたって人間の日常の福祉に対して開かれた「総

合芸術」の可能性を探ってきた本学部の理念の実現への一つの適用例としても注目に値する。

以上により本論文は中学校講師の自己表現に対して新しいパフォーマンス学の視点を提供した論文だとして高く評価できる。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

平成 28 年 1 月 28 日